

E 国 語 問 題

注 意

- 一 試験開始の指示があるまでこの問題冊子を開いてはいけません。
- 二 解答用紙はすべてHBの黒鉛筆またはHBの黒のシャープペンシルで記入することになっています。HBの黒鉛筆・消しゴムを忘れた人は監督に申し出てください。
(万年筆・ボールペン・サインペンなどを使用してはいけません。)
- 三 この問題冊子は20ページまでとなっています。試験開始後、ただちにページ数を確認してください。なお、問題番号は一〜三となっています。
- 四 解答用紙にはすでに受験番号が記入されていますので、出席票の受験番号が、あなたの受験票の番号であるかどうかを確認し、出席票の氏名欄に氏名のみを記入してください。なお、出席票は切り離さないでください。
- 五 解答は解答用紙の指定された解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはいけません。
- 六 解答用紙を折り曲げたり、破ったり、傷つけたりしないように注意してください。
- 七 この問題冊子は持ち帰ってください。

マーク・センス法についての注意

マーク・センス法とは、鉛筆でマークした部分を機械が直接よみとって採点する方法です。

- 一 マークは、左記の記入例のようにHBの黒鉛筆で枠の中をぬり残さず濃くぬりつぶしてください。
- 二 一つのマーク欄には一つしかマークしてはいけません。
- 三 訂正する場合は消しゴムでよく消し、消しきれずはきれいに取り除いてください。

マーク例

①	1	2	3	4	5
0	0	●	0	0	0

(3と解答する場合)

一 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答题紙に書くこと)

筆者が若かった頃、薬師丸ひろ子はさらにまだ若く、映画の主演もしていた。『Wの悲劇』(澤井信一郎監督、荒井晴彦・澤井信一郎脚本、一九八四)もその一つである。三田村邦彦の悪役ぶりが際立っていた。

薬師丸ひろ子演ずるヒロインは、女優を目指す劇団の研究生である。一夜を過ごした翌朝、男友達(世良公則が演じていた)に「今日、ここに戻ってこないか」と言われて彼女は、「どうして」と聞く。「好きだから、それに……」と言いよどむ彼に、彼女は「寝たから? ……私、はじめてじゃないのよ、わかったでしょ。いるのよ、好きな人」とつれないソブリを見せる。「じゃあ、どうして俺と」と問われたヒロインは、相手の顔は見ずに「そうしなかったから」と答え、彼のアパートを後にする。

「そうしなかったから」という台詞。これは、「そうした」理由を述べている、わけではない。何かをするとき「そうする」意思があるのは、当たり前である。

それとも、そうすることを欲していたということであろうか。しかし、欲求そのものは行動の理由ではない。何かを欲することにも理由がある。そして、欲することの理由は、なぜそうしたかの理由そのものである。なぜ欲したのか、その理由を述べないで、「そうしなかったから」とだけ言ったのでは、⁽¹⁾ まともに問いに答えたことにはならない。

むしろ、「どうして俺と」という理由を尋ねる問いへの回答を拒否している⁽²⁾と見るべきであろう。「その問いに答えるつもりはない」というのが、この台詞の意味である。このヒロインは、誰となぜ寝たかについて、いつも素直に答えられない人間として描かれている。

とはいえ、最小限「そうした」のが自分の意思に基づき、自分の選択した行動であって、無意識の反射的行動であったり、アルコールの過剰摂取の結果であったりしたわけではないという趣旨は、この台詞に含まれている。自分が何をしていたかは分かっていた。

しかし、自分の意思に基づく行動であったことだけが示されているわけでもない。人は、その気にならないことは、よほどの理由がない限りしないものである。

複数の職業への途が開かれている、それぞれに十分、選択すべき理由があるというとき、人はその気になれないという職業はふつう選ばない。誰と寝るかという選択においても、その気にはなれないという人とは、よほどの事情がない限り、そうしないはずである。

その気はあった。しかし、これも「そうする」理由ではない。そうしたいという気持ちにはなれないが、理由を熟考してやはりそうすることもよくある（苦手な科目の試験勉強をする、歯医者に行く等）⁽²⁾。その気の有無は、理由とは別の次元に属する。

人が日常で直面する複数の異なる行動の選択肢は、往々にして、それぞれ十分な理由によって支えられている。たとえば、今日の夕刻、N響のコンサートがあるとす。^(注1) シヤール・デュトワのおかげもあって、現在のN響は世界最高水準のオーケストラだから、きつとすばらしい演奏を聞かせてくれるだろう。幸い席は余っているし、チケットを購入する程度の余裕は、私にもある。コンサートに出かけない理由はなさそうである。しかし、私には他の選択肢もある。朝から霞が関で会議が続き、神経の磨り減った私としては自宅でゆっくり休息をとるべき理由もある。さらに、「爆笑問題」^(注2) 司会(注)のゴラク番組をテレビで視聴すれば、憂さも暗れるかも知れない。

これら二つの選択肢で考えたとしても、それぞれ十分な理由がある。しかし、互いに他の選択肢を打ち消す、それに優越する理由ではない。両者は比較不能である。どちらが優れているとも言えず、同等だというわけでもない。一つの共通のものさしで、二つの価値を比べることはできない。どちらを選んだとしても、十分な理由に支えられた善い選択である。それぞれ十分な理由のある選択肢に直面して、人は自らの意思でいずれかを選ぶ。その選択を通じて、人は自分がどんな人間であるかを自ら決めていく。

⁽³⁾ こうした意思決定のモデルに対しては、行動の選択肢はすべて一つのものさしで一元的に比較評価することが可能だという、もう一つのモデルが対比される。それぞれの選択肢をとったとき、私が期待できる効用や収入が

らコストを差し引くことで、すべての選択肢の価値を一元的に比較することができる。私がすべきなのは、最大の効用あるいは収益を与えてくれるような選択肢を選ぶことである。人間は、いわば自己の効用を最大化するべくプログラミングされた機械であつて、そう行動するよう決定されているだけでなく、そうすることは倫理的にも正しい。このモデルからすると、人の意思決定にさしたる意味はない。機械が不調を起ささない限り、正しい意思決定が何かは自動的に決まっている。

この二番目のモデルは、大量現象として観察したときに、人間がどのように行動しがちであるかを遠くから観察し、説明するための枠組みとしては、多少の有用性があるかに見えるが、個々人がいかに行動すべきかを説明するためのモデルになぜなるのか、筆者には理解できない。少なくとも、このモデルに基づいて行動すべきだと考えている人と、友達にはなれないと筆者は思う。自己利益と友情とは比較不能である。

⁽⁴⁾ 多様な選択肢の比較不能性は、生きる実感である。これではなく、あれを選んだとき、何を得て何を失うのか、それは一度の人生での一度切りの選択、やり直しの利かない、比べようのない選択である。しかも現に選択し、経験しなければ、得たものが何かを知ることはできない。結婚、就職、転職といった重大な決定の機会だけでなく、今日の夕刻をどう過ごすか、昼食に何を食べるかについても、比較不能性はつきまとう。

理由のみによつては決まらないという状況での、理性を超える選択を方向づける一つの要素が「そうしたい」という気持ちである。すでに述べたように、それは「そうする」理由ではない。

『Wの悲劇』に戻ると、男友達は、「そうしたかった」というヒロインの意思決定は（自分を好いてくれていたというその気持ちも含めて）、将来にわたる長期的で広範なコミットメント——これから自分とずっと付き合っていくこと——を含蓄しているという淡い期待を抱いた。「今日、ここに戻ってこないか」という台詞は、そうした彼の思いを明かしている。でも、そんなコミットメントをしたおぼえは彼女にはない。ただ、そのときは、そうしなかった。そうしないこともできたが、自分はそうすることを選んだ。それは、理由づけの力が途切れた後の、理性を超えた選択である。

(5) しかし、それは理性の制約の下での選択でもある。そうすることには、理由があつたはずである（ヒロインにとつて、とてもせつない理由が）。ただ、その理由はすべてを説明しはしない。理由によつては説明し尽くせない余地、理由と現実にとられた行動とのギャップは必ず残る。意思決定とはそうしたものであり、だからこそ意思決定が必要となる。

（長谷部恭男『憲法の imagination』2016）

（注） 1 シャルル・デュトワ——スイス出身の指揮者（一九三六）。

2 爆笑問題——日本のお笑いコンビ。

問

(A) 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。（ただし、楷書^{かいしよ}で記すこと）

(B) 線部(1)について。その理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 問いに答えたくないという気持ち^{きもち}が明らかに読み取れるから。
 - 2 人間が単純な欲求から行動することはほとんどないから。
 - 3 欲求の存在そのものは欲求の理由とはなりえないから。
 - 4 あまりに簡潔すぎて具体的な説明となっていないから。
 - 5 何らの理由も伴わない欲求というものも考えられるから。
- (C) 線部(2)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。
- 1 そうしたいという欲求にかかわる判断は、行動の理由にかかわる合理的な思考と異なり一貫性を欠く。
 - 2 人はたとえ熟慮のうえ十分な理由があると判断しても、その気が起きなければしないのが普通である。

3 「その気」とは自分の意思に基づく行動であることを意味しており、行動の理由とは無関係である。

4 理由は複数存在しうるため各々を比較する必要があるが、欲求は本能的に発生する単一のものである。

5 人はそうしたいと思わないことであっても、理由を考慮してそうすべきであると判断し行うことがある。

(D) ——線部(3)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 行動の理由は相互に比較不能であるから、その人自身が決断して選び取っていくほかはない、という考え方。

2 行動の理由を選択する際、欲求に従うのではなく熟慮を重ねることによって人格が形成されていく、という考え方。

3 人間の行動を大量現象として観察するのではなく、むしろ個人に着目して行動の理由を比較すべきだ、という考え方。

4 行動の理由の優劣について直ちに結論を出すのではなく、まずは行動してみることが重要である、という考え方。

5 人は相互に比較可能な理由から行動しているわけではなく、むしろ衝動的に行動を選択している、という考え方。

(E) ——線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 選択肢によっては自分の人生に大きな影響が生じるため、いずれを選び取るかを決めるに際しては真剣さが増す。

2 自己利益と友情が比較不能であるからこそ、価値観の異なる人とも友達になれて人生がより豊かなものになる。

3 重大な決定の機会だけでなく、あらゆる局面で選択の帰結を予想しなければならず、漫然と過ごすことがなくなる。

4 個々の選択肢の帰結をあらかじめ比較できないからこそ、ある行動を選択する際に自身の主体性が生まれる。

5 選択肢に優劣をつけられない以上、結局は本能的な欲求に従うことになり、ストレスなくのびのびと生きられる。

(F) ——線部(5)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 人は理性から離れて自由に意思決定しなければならないこともあるが、合理的な思考を完全に免れることはできない。

2 個々の選択を支える理由の優劣は理性によって決められないが、理由は選択を十分に支えるものでなければならぬ。

3 理由づけの力が途切れれば理由と選択とのギャップが生じるが、それは最終的には理性によって埋められない。

4 相手がどのような意思決定をするかを合理的に予測することはできないが、その意思決定自体は理性に支えられている。

5 「そうしたい」という気持ちは選択に不可欠であるが、あくまで理性とのせめぎあいのなかで意思決定を方向づける。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 人は行動を選択する際、少なくとも「そうする」意思はもっている。

ロ 『Wの悲劇』のヒロインの答えは実質的には回答の拒否である。

ハ 人は十分な理由があっても気乗りしないことは拒絶する。

ニ 行動の選択肢を二元的に比較評価できると考えれば、友情という観念自体が成り立たなくなる。

ホ 自分では理性に従っているつもりであっても、実際には衝動的に行動していることがよくある。

二 左の文章を読んで後の設問に答えよ。(解答はすべて解答用紙に書くこと)

近代百二十年のあいだに日本語で書かれた大量の文学作品を一つのテキスト、集団制作による大河小説として連続して読むことはできないだろうか。

ずっと以前、まだわたしの家に小さな子どもたちがいたころのこと、理由もないのに仕事にでかけるのが辛く思える日があった。同情した一人の子どもがいうには、「僕が大きくなったら、何べん読んでも飽きない大きな本を一冊あげるから、あなたは椅子に坐って、一日中ずっとその本を読んでいなさいね」。そうはならなかった。わたしはそれからもずっと働きつづけている。それにわたしの仕事は、小説をふくむさまざまな出来事を読み解き、講義をしたり、討論をしたりすることである。家で読みはじめた本を電車の中で読みつぎ、研究室で読み、身近に病人がいるときには、夜の病室で読む。そうやってたくさん本を読んだ。

あれから長い時間が経ったが、今でもときどき、まだ字も知らない子どもが、いつかわたしに贈ってくれるといった大きな本のことを考える。あれは結局、わたしが一生に読む全部の小説のことだったのだろうか。その大きな本の背表紙には、どんな題名が刻まれているのだろう。読むとは、どういう行為なのか。

ある市民講座の講師の依頼をうけたとき、わたしは「文学に表れた家族と家——いろいろ端のある家、茶の間のある家、リビングルームのある家」というテーマで、受講生とともに、一年間に三冊の本を読むことにした。同じころ、新聞の一面広告に、「団樂の構図の変化——いろいろ、茶の間からリビングルームへ」という住宅建設会社のコピーを見つけて、胸をつかれたことがあった。

八〇年代はじめの当時すでに、売るための家は「リビングのある家」ばかりであった。だが、その少し前までは、わたしたちは「茶の間のある家」に住んでいた。わたし自身は「いろいろ端のある家」も覚えていた。明治革命以後、たった一世紀余りのあいだに三種類の家と三種類の団樂、すなわち三種類の家族の形と、さらにその後を生きているとは、おどろくべき変化速度である。石造りの家の多いヨーロッパの場合とくらべれば、日本の木

造建築の家は建て替えが自由自在である。しかし人間関係の組み替えが容器のつくりかえほど容易であるはずはない。モデル・チェンジのあるたびにどれほどの期待、喜び、苦しみがあったことか。日本の近代小説の主流は私小説といわれるが、ほとんどの私小説が「私」の容器を探して家に移り、建て替える物語を語ってはいなかったか。

そこで講座では、^(注1)島崎藤村の「家」、^(注2)小島信夫の「抱擁家族」、^(注3)津島佑子の「光の領分」をとりあげて読んだ。藤村の「家」は、ようやく「茶の間のある家」にたどりつきはしたが、「いろいろ端のある家」の人間関係をひきずって苦しむ男の物語。小島の「抱擁家族」は、「茶の間のある家」を「リビングのある家」に建て替えて幸福をつかもうとしたのに、不幸になる男の物語。そして、津島佑子の「光の領分」は、「リビングのある家」からも出て、幼い娘とともにどこへ行くかと考えている若い女の物語であった。三つの小説は一つの長い物語として読むことができる。途中で語り手が男性から女性へとかわるということも興味深くおもった。その後、何度このテーマをとりあげて考えた。

今ではわたしは、家族と住まいのモデル・チェンジはもう少し複雑なのだと考えている。日本の戦前家族は「家」制度であったといわれるが、じつは「家」／「家庭」は二重構造になっていた。戸籍の上では、父あるいは長兄が戸主である大人数の「家」家族に所属する。しかし現実には、都市で世帯をもつて、夫婦と子どもだけの核家族による「家庭」を築いて日々の生活を送った。都市にある「家庭」家族の入れ物である「茶の間のある家」は多くの場合、a であった。自然災害、不況、戦争のたびに「家庭」家族は「茶の間のある家」をホウキし、⁽⁴⁾「家」家族の庇護をもとめて、村にある「いろいろ端のある家」に帰ったのであった。「家」制度／「家庭」制度に対応する住まいモデルは「いろいろ端のある家」／「茶の間のある家」であつて、これも二重構造であつた。

また、明治民法には分家という仕掛けが組み込まれていた。これを利用して創設一代目の家長となり、やがて都市に定住する、あるいは植民地へと飛躍する新しいタイプの家長も生まれる。新しい家長がつくる家族は、夫婦と子どもたちから成つており、むしろb である。こうして近代日本の意欲的な新中間層はしだいに厚み

を増したのであった。

戦後の改正民法からは「家」制度が消えた。「家」／「家庭」の二重家族制度は、とかげの尻尾切りのように「家」を切り捨て、あるいは「家」観念を「家庭」の中にひそませて戦後を生きのびた。変化はつづき、「家庭」家族の容器であった c は、高度成長期からは (注4) nLDK設計、個室本位の「リビングのある家」にモデル・チェンジをしている。また、戦前の都市の住民の多くは借家に住んでいたが、戦後は政府の持ち家政策により、都市に定着する人口が増えた。郊外に一戸建てを、マンションの中に持ち家を購入しようとする住民の持ち家願望は強い。そのかたわらで子ども部屋が空中を浮遊して別の都市まで移動したような「ワンルーム」というモデルも生まれた。「リビングのある家」／「ワンルーム」も、電話や仕送りでつながる二重構造になっている。(2) 部屋の時代のはじまりである。これに対応する「家庭」／「個人」が家族の新しい二重制度であろう。ただしこの「個人」は、財産と家族を擁した威厳のある近代的個人ではなく、それぞれがそれぞれの尊厳のみをもつ大衆社会のささやかな個人である。

(3) 繰り返される二重構造には、「家」「家庭」といった家族のあるべき形として示されたモデルにたいする強い憧れと反発が共存している。モデル・チェンジがあるたびに生じるカットウを、小説は描きつづけた。人々はモデル・チェンジの度に住まいを探し、家を建て替え、その度に苦しむ。

自分たちの幸福を探す努力がなぜ苦しみになるのだろう。家族や住まいの規範やモデルに従う場合だけでなく、規範とモデルに反抗する場合さえ、家づくりの努力の向こうには、国づくりの大きな流れがある。家族をつくり小さいながら家をもつ喜びのつづきのようにして、その家族と家を守ると自分にいい聞かせて戦争へ行った兵士たちがいた。それぞれの努力はいつか、(4) もっと巨大なものに回収されている。個々の小説は、相もかわらぬ人と人の出会いと離別、子生み、成長、労働、病、死の小さな物語をくりかえし描く。くりかえしなのだが、それぞれの人生が違うように物語は少しずつ違う。多数の物語が流れ込む大きな物語の存在を感じるの、それぞれの小説の作者よりもむしろ、小説を読みつづける読者であるかもしれない。読むとは、書くと同じく積極的な行

為になり得るのだと思う。

(西川祐子『借家と持ち家の文学史』による)

(注) 1 島崎藤村——詩人、小説家(一八七二—一九四三)。

2 小島信夫——小説家、評論家(一九一五—二〇〇六)。

3 津島佑子——小説家(一九四七—二〇一六)。

4 n LDK——nとは個室の数を指し、それに合わせリビング「L」、ダイニング「D」、キッチン「K」によって住居の間取りを表わす表記法。

問

(A) 〓 線部(イ)・(ロ)を漢字に改めよ。(ただし、楷書で記すこと)

(B) —— 線部(1)について。ここで言われている「読むこと」とはどのようなことか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 この世界にまだ存在しない、あらゆる文学作品を包括するような偉大な文学作品を心の中で描き出すこと。
 - 2 固有のモチーフに則った大きな見取り図の下で構想されたものとして個別の小説を理解すること。
 - 3 市民講座の中で受講者たちのために三冊の本を選び、時間をかけてそれらを読み解いていくこと。
 - 4 個々の作品を読むことを通じて、無数の物語が流れ込む大きな社会的物語を見出していくこと。
 - 5 かつて大きな本について語ってくれた際に、子どもが頭の中で思い描いていた内容を想像してみること。
- (C) 空欄

a

}

c

 にはそれぞれどのような言葉を補ったらよいか。その組み合わせとして最も適当なもの、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- | | | | | | | |
|---|---|-----|---|---------|---|-------------|
| 1 | a | 借家 | b | 「家」家族型 | c | 「茶の間のある家」 |
| 2 | a | 借家 | b | 「家庭」家族型 | c | 「茶の間のある家」 |
| 3 | a | 借家 | b | 核家族型 | c | 「いろいろ端のある家」 |
| 4 | a | 持ち家 | b | 核家族型 | c | 「いろいろ端のある家」 |
| 5 | a | 持ち家 | b | 「家庭」家族型 | c | 「茶の間のある家」 |
| 6 | a | 持ち家 | b | 「家」家族型 | c | 「いろいろ端のある家」 |

(D) ——— 線部(2)について。「部屋の時代」が意味する内容はどのようなものか。最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 「いろいろ、茶の間、リビングルーム」といったこれまで存在していた様々な種類の部屋が共存可能になった時代。

2 個室本位の「リビングのある家」にモデル・チェンジが行われ、家族の新たな集住形態が営まれるようになった時代。

3 個人が外部と分かれた「ワンルーム」を手に入れて、思うままに自由に生きていくことが可能になった時代。

4 ひとり暮らしを始めても、自身が新しい家族をつくるよりも、実家の子ども部屋にいた時期と連続したような生活を送りがちな時代。

5 人々が持ち家願望から解放され、都市に住むことができれば「ワンルーム」を借りるかたちでも良いと考え始めた時代。

(E) ——— 線部(3)について。「繰り返される二重構造」の内容として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 幸福を探す努力が苦しみに転換してしまう社会的な矛盾。

2 家族と住まいにおける新旧の規範の並存。

3 「家」／「家庭」という家族制度の絡まり合い。

4 生活の中での喜ばしい出来事と悲しむべき出来事の反復。

5 家という容器とその中身としての生活の間にある困難を伴った関係性。

(F) 線部(4)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 家族と国への深い愛情から戦地に向かった兵士たちの思いが、個々人の感情を度外視した理解の中で無視され非難されてしまうこと。

2 家族の容器のモデル・チェンジがあるたびに生じる感情の機微を描いてきた小説の試みが、人々の幸福を探す欲望の中でかき消されてしまうこと。

3 作家たちが自分のささやかな生活を表現するために書いた個々の小説作品が、読者の読むという行為の中で大きな物語に吸収されてしまうこと。

4 「家」制度という古い観念が戦後に入って表面的に消えたかのように見えたとしても、それは結局のところ、「家庭」の中に身をひそませ、戦後も生き延びてしまっていること。

5 個々人が身近な家族の生活をなによりも大事にしようとした結果として、国家の体制の中に組み込まれてしまうこと。

(G) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 日本の近代小説の主流をなす私小説が試みてきたことは、個々の小さな物語を歴史に結びつけて描き出すことである。

ロ 新聞の広告コピーを読むことの中にも、文学作品を読むことと同様の胸をつく芸術的経験が存在している。

ハ 明治革命以後の日本社会の家族の形のおどろくべき変化速度の理由は、ヨーロッパと比較することによって明らかになる。

二 講座で読んだ小説においては、女性主人公と比べて、男性主人公の「私」の容器への執着を見ることができると。

ホ 近代日本の新中間層の普及には、人々が生まれた場所から離れていく過程が大きな意味を持っていた。

三 左の文章は、『うつほ物語』の一節で、大将（仲忠）が娘のいぬ宮に「琴」の奏法を伝授することを伝えに行く場面である。琴（弦楽器の総称）の中でも七弦の「琴」は難解な奏法が秘伝で伝わっており、仲忠は、祖父から伝わる「琴」の奏法を体得している名手である。これを読んで後の設問に答えよ。（解答はすべて解答题用紙に書くこと）

いぬ宮の御方には、同じ母屋の西に、げに小さき几帳立ててしつらひたまへり。小さき人々、ささやかなる碁盤に、碁打ち居たり。御手の、綾の単衣の黒きよりさし出でたまへる、いとうつくしげにおはす。稚児宮・兵衛など、いぬ宮と、いかか打ちたまへるとて見たまへば、恥ぢたまひて打ちたまはず。これら、見つけて走れば、「いとふかひなき御供人かな。裳着たる足音にはあらずや」とのたまへば、大人ども、げにとて笑ふ。

大将、いぬ宮に聞こえたまふ、「弾かまほしくしたまふ琴習はいたてまつらむを」とのたまふより、いとうれしと思ひて、笑みたまへる、いとはなやかに、見まほしう、愛敬こぼるるばかりにておはするを、いとうつくしと見たてまつりたまふ。「琴習はせたまはば、宮には聞かせたてまつらでなむ習ひたまふべき。いと面白うをかしき所に率てたてまつりてむ。尚侍のおとどはおはししなむや」とのたまへば、「さりとも、宮おはせでは、いかでか」とのたまへば、「いとくちをしく。さては、不用に侍なり。人に聞かせで、仲忠・尚侍のおとどなむ、人に教へ侍る。しばし念じたまひておはしませ。さて、よく弾き取りたまひてむほどに、宮はおはししなむ」と聞こえたまへば、「さらば、よかりなむ。なごて、宮には隠したまふぞ」「みな人の聞くにも弾きたまふは、この侍る琴をなむ、さは弾きたまふ。これは、異なり。人に聞かせれば、声もせず、え習はず侍る。宮も二の宮もおはせ所なり。いと面白くなむ侍る」と聞こえたまへば、「さて、ちやはは」とのたまふは、中に思す御乳母なりけり。「それは、近う候ひなむ」「さは、宮うちやましとのたまはむな」「されど、声聞かぬほどにこそは侍りて、御乳欲しうおはしなさむほどは、ふとおはしませせてむ」「さて、なほ、久しくや、宮は見たてまつらざらむずる」などてか。ただし「はしなり」と聞こえたまふにも、「いとあはれに、纏はしたてまつりたまへるに、稚児

におはするはこしらへてもおはしなむ、宮、いかに思しのたまはすらむ」といどほしけれど、さるべきことならねばと思す。

(注)

- 1 御方——お部屋。
- 2 小さき人々——稚児宮・兵衛などいぬ宮付きの女童。
- 3 大人ども——年配の女房たち。
- 4 習はい——「習はし」のイ音便。
- 5 宮——いぬ宮の母。母宮。
- 6 尚待のおとど——仲忠の母。琴の名手で仲忠に奏法を伝えた。
- 7 おはしましなむや——きつとおいでになりますよ。「や」は詠嘆の終助詞。
- 8 二の宮——母宮の妹。
- 9 ちやは——いぬ宮の乳母。

問

(A) ——線部(1)について。その説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 いぬ宮の手が単衣から少し見えているのがとてもかわいらしい
- 2 いぬ宮があでやかな単衣から手をのぞかせており非常に美しい
- 3 いぬ宮の打つ碁の手がいかに見事である
- 4 いぬ宮の打つ碁の手が稚拙で大層ほほえましい
- 5 いぬ宮が先に碁を打ってしまう様子が何ともかわいらしい

(B) ——線部(2)について。「大人ども」が笑った理由として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 仲忠がいぬ宮たちを戯れで追い掛け回す姿が滑稽だったから。

- 2 仲忠に見られたいぬ宮が照れてしまい碁を打とうとしないから。
- 3 いぬ宮付きの女童たちがいぬ宮を守らず逃げてしまったから。
- 4 いぬ宮付きの女童たちがはしたないことに裳を着たまま走ったから。
- 5 いぬ宮付きの女童たちが裳を脱ぎ捨ててしまったから。

(C) —— 線部(3)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 私も弾きたいと思っていた琴を
- 2 誰もが弾きたがつていらつしやるような琴を
- 3 あなたが弾きたがつていらつしやつた琴を
- 4 あなたが私に弾いてもらいたがつていらつしやつた琴を
- 5 あなたにお弾きいただきたいと思っていた琴を

(D) —— 線部(4)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 母宮には琴のことは申し上げないでお習いになる方がよいでしょう
- 2 母宮に琴のことを申し上げないでお習いになることができましょうか
- 3 母宮に琴の音をお聞かせしないでお習いになることができましょうか
- 4 母宮には琴の音をお聞かせしないでお習いにならねばなりません
- 5 母宮にお聞かせしたことのない曲をこそお習いになる必要があります

(E) —— 線部(5)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

- 1 母宮と一緒に連れられたら、尚侍のおとどが嫌がつてしまうかもしれないので
- 2 母宮は風情のある場所にお連れして、尚侍のおとどにお世話してもらえらるとしても
- 3 母宮を風情のある場所にお連れしたら、尚侍のおとども来てくれるかもしれないので
- 4 風情がある場所なので、尚侍のおとどもたいそう喜ぶであろうことは分かるが

5 風情がある場所で、仲忠に加えて尚待のおとども琴を教えてくれるのだとしても

(F) ——— 線部(6)について。このように発言した理由の説明として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 いぬ宮は、母宮がいないのであれば琴など習う必要はないと諦めたから。

2 いぬ宮は、母宮がいなくて寂しいのだろうと子ども扱いされ拗ねたから。

3 仲忠は、母宮を恋しがつていぬ宮が承服しないことが残念だったから。

4 仲忠は、いぬ宮が本当は琴を習いたくないことを知って驚いたから。

5 仲忠は、いぬ宮が仲忠よりも母宮を慕っていることに失望したから。

(G) ——— 線部(7)の現代語訳を五字以内で記せ。ただし、句読点は含まない。

(H) ——— 線部(8)の現代語訳として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 どうして母宮にはお隠しになるのですか

2 どのように言つて母宮にはお隠しなさるおつもりですか

3 どうして母宮にはお隠しになれましょうか

4 どうしても母宮にはお隠しするのですか

5 どのように母宮がお隠しになるのですか

(I) 空欄 について。ここに入る助動詞「じ」を正しい活用形で記せ。

(J) ——— 線部(9)の解釈として最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で答えよ。

1 母宮がいぬ宮を大切にしているとはいえ、それは今は関係ないので

2 母宮が気の毒だからといって、連れて行ってよいわけではないので

3 母宮がいぬ宮をどのように考えているか知りたいが、それは不可能なので

4 いぬ宮が母宮を慕っているとはいえ、母宮のもとを離れる必要があるのでは

5 いぬ宮が不憫だからといって、わがままをゆるすことはできないので

(K) 線部(a)～(c)の中で七弦の「琴」を表すものとして最も適当なものを、次のうちから一つ選び、番号で

答えよ。

- 1 (a)
- 2 (b)
- 3 (c)
- 4 (a)と(b)
- 5 (b)と(c)
- 6 (a)と(c)

(L) 次の各項について、本文の内容と合致するものを1、合致しないものを2として、それぞれ番号で答えよ。

イ 仲忠は、いぬ宮が大人へと成長した今が、琴を伝授するよい機会だと捉えている。

ロ いぬ宮は、実は尚侍のおとどのことを苦手に思っている。

ハ いぬ宮は、琴が弾けるようになるまでは母宮に会わない決意を固めた。

ニ 乳母は、いぬ宮が琴を習っている音を聞くことができる。

ホ 仲忠は、いぬ宮が幼いので、何とか説得できると考えている。

【以下余白】